

字音接辞〈化〉の論

工藤力男

要旨

漢字「化」が二字漢語に接辞としてはたらくのは、本来、名詞についた「女性化」、状態を表わす語についた「温暖化」のように、動詞性を附与するためのはずである。ところが、近年の日本語には、「細分化」のように、二字漢語の動詞に接する用法が多くみられる。本稿は、その実例を広く集め、この用法が広がった背景を考えようとするものである。

一 発端

この現象にわたしが最初に気づいたのは四十年前、へ講座『国語史』5の『敬語史』（大修館書店1971）の一篇、M氏の論中に次のような表現を見たときである。

・「きいゆ」系の退潮化

・謙讓表現から丁寧表現がようやく顕著に分立化する

・場面相関的な待遇表現が形成化されていく

・それに対応するその言語的具現化

これが一つのページ（p.151）に出現したのである。「化」は要らないなあと思いはしたが、それきり忘れてしまっていた。

それを再び意識したのは十年前である。同時多発テロとよばれることになる事件について、朝日新聞朝刊は「タリバン孤立進む」の大見出しで報じた（2001.9.23）。アラブ首長国連邦が断交したのである。本文には「サウジアラビアも米国の対テロ作戦への協力を表明するなど、タリバンの孤立化が進んでいる。」とあった。見出しが「孤立」、本文が「孤立化」であるのはなぜか、という疑問である。（以下、「化」の

ついた形を肥大形、つかない形を原形と称することがある。また、「化」の引用符を省いて化のように太字でかくこともあるほか、他の語についても太字を用いることがある。新聞名を特記しないばあいは朝日新聞である。()

動詞化の字音接辞化について、『日本国語大辞典』第二版(以下、『日国大』と略記)は、「名詞の下に付けて、そういう物、事、状態に変える、または変わるといふ意を表わす」と説明し、幕末・明治初期に、醇化・美化・悪化など、化つきの新語が多く造られ、明治後期から大正にかけて化の接尾語化が進み、機械化・国有化・一般化など、多くの三字語を生み出したという。他の国語辞書の記述には「主に漢語につく」が加わっている程度の差しかないのに、この説明をそのまま受け入れていいだろう。

上引の化の定義は「変化の意を表わす」と要約しうる。そもそも「動詞」は、「語の表す内容が時間の経過とともに変化する」(『日本語文法大辞典』山口明穂執筆「動詞」)ことを表わす語で、語義の中に既に変化を含蓄するのである。冒頭にあげた四語もしかり、特に「退潮」がそうだと見えるし、第二例の「分立」は副詞「ようやく」によつて時間による変化が明示され、第三例「形成」には未来時の進行のアスペク

ト形式「ていく」が加わっている。わたしが化は要らないと感じたゆえんである。

そこで、タリバーン「孤立化」に接してからの十年間、漢字二字による動詞の語基にさらに接辞「化」のついた語を、耳目にふれるつど書きとめてきた。網羅的でも体系的でもないのだが、それでも六十ほどになり、何かがみえてくるかもしれないと思うに至った。

二 肥大形さまざま

これまでに拾いえた肥大形を、『日国大』の扱いを基準にして甲・乙・丙の三類にわけ、それぞれ五十音順に掲げる。そして、気になる若干の語について一言する。

甲類 『日国大』に掲載された肥大形(六語)

顕在化 固定化 細分化 組織化 流動化 老朽化

乙類 原形が形容動詞とされた語(五語)

乾燥化 硬直化 沈静化 肥大化 老朽化(重出)

丙類 原形が名詞・サ変動詞とされた語(五十四語)

安定化 印刷化 概括化 開放化 拡大化 加速化
過熱化 共有化 具現化 軽減化 形成化 結晶化

顕現化	顕在化	減少化	減退化	限定化	減量化
合一化	混一化	差別化	実現化	終結化	集中化
集約化	出版化	自立化	衰弱化	衰退化	成熟化
潜在化	増大化	退潮化	超越化	徹底化	統一化
独占化	内在化	二分化	肥満化	表現化	普及化
複製化	腐敗化	腐乱化	分散化	分社化	分譲化
分節化	分立化	明示化	量産化	冷却化	歪曲化

この三つの区分けにはどんな意味があるだろうか。

右にあげた肥大形から化を除き去った原形すなわち二字漢語は、既に日本語の語彙体系に確かな位置を占めているといっている語である。それなのに、何ゆえにさらに化を添えたのだろうか。あえて辞書に登載された甲類の六語は、その接辞がもはや語基と切り離しえないとか、語基の本来の意味を変えているとか、あるいはまた、肥大形を特にとりたてる必要があったとかいうことが考えられるだろう。だが、右の六語のうち、わたしがその必要を感じたのは「組織化」だけである。

「組織」は、名詞としても動詞語基としても使われた語で、名詞としての用例は、具体・抽象の両面にわたって多様である。自分も、動詞として使おうとすると、それでいいの

と迷うことがある。ごく最近、毎日新聞のネット配信記事(2011.4.6)、「ハコトジボワール」前バグボ大統領 権限委譲を拒否」に、「仏のサルコジ大統領は同日、元首相に早急に新政府の組織を要請しており、云々」とあった。この「組織」は名詞なのか動詞語幹なのか、しばらく考えさせられたのである。現在のわたしは、これは動詞として用いたのだと判断している。

甲類のうちの他の五語について、『日国大』の初出文献をあげておく。「顕在化」は小田切秀雄『現代における自我』(1959)、「固定化」は東畑精一『学生時代の回顧』(1936)、「細分化」は「農業基本法」(1961)、「流動化」は柴田翔『されどわれらが日々』(1963)である。「老朽化」については次項でふれる。

乙類は、原形が形容動詞すなわち《相言》なのだから、化によって動詞性を獲得するのは当然である。これをあえて一類にまとめたのは、自分はこれを形容動詞とは認識しておらず、「空気が乾燥する」のように動詞として用いるからである。須賀敦子『ミラノ霧の風景』の一篇「遠い霧の匂い」は、「乾燥した東京の冬には一年に一度あるかないかだけれど、ほんとうにまれに霧が出ることがある。」で始まる。わたし

にはいかにも自然な表現なのだが、新聞は、「気温の上昇による乾燥化が原因らしい」(2010.3.10) などとかくので、わたしはうるたえるのである。

他の四語の原形についても、わたしは相言としての用法をしらなかつた。それぞれについて『日国大』から辞書類以外の用例を一つずつあげておく。長塚節『土』(1910)の「雑木林の間には又芒の硬直な葉が刺さうとして立つ」、小栗風葉『青春』(1905~06)の「実に幽遠な、沈静な、何だか現実を離れた他界」、島崎藤村『破戒』(1906)の「一人の肥大な老紳士」、同「老朽な小学教員の一人」。

多くの現代日本人はこれらを相言とはみないだろう。『日国大』よりも記述が簡略な『広辞苑』第六版についてみると、「硬直」には品詞表示がなく、すなわち名詞扱いで、用例「硬直した姿勢」「硬直した体制」「死後硬直」があって、相言の用例はみえない。「沈静」についても品詞表示はないが、語義は「おちついてしずかなこと。氣勢がしずまること。」とあって、「インフレが沈静する」の用例があり、語義の前半は相言といえる記述である。この辞書に従うと、原形・肥大形ともに用例があつていいことになるが、わたしの得た現代の用例の原形はすべて動詞としてのものである。「老朽」

については名詞の語義しか記さず、追込み項目に「老朽化」がある。わたし自身、無自覚に肥大形「老朽化」を使っていた。なお、『日国大』が「老朽」「老朽化」ともに立項するわけは不明である。単なる調整不足だろうか。

わたしは「乾燥化」に違和感を覚えるのだが、それは自分の無智ゆえであつた。原形は漢文にも相言としての用例があり、『日国大』は「吾輩は猫である」から「宛転たる嬌音を以て、乾燥なる講筵に一点の艶味を添へられた」などをあげている。漢文の素養の深い人なら、「乾燥」をはじめ、かなりの数の二字漢語を相言として認識し、化による動詞化にとまどうことはないだろう。現に、『日国大』は「衰弱」の項に、古活字版毛氏抄の巻第廿から「又契より後に君衰弱にして土地が減削られて」をあげている。「肥満」の項には、正宗白鳥『塵埃』から「肥満な呑気な顔を電気の光にさらし」と載せている。

圧倒的多数の丙類について個々に言及することはできないので、特に留意する必要があると考える語についてのべる。わたしの得た「分社化」は、すべて「会社を分かつ」意で用いられたものである。だが、その意味なら「分社」が既に表現しえているので、この化は余剰な接辞だというのがわた

しの判断である。もしかしたら、「分社」は、神霊を本社から分けて祀った神社の意の名詞であるという、原義の知識が干渉して同形異語の「分社」を用いたという解釈ができるかもしれない。しかし、その蓋然性はほとんど無に近いだろう。

言語学関係の文章に多く見るのが「分節化」である。「分節」は、漢語の《述語・補語》構造とみて「節に分かつ」と解釈することも、《修飾・被修飾》構造の「分かれた節」と解釈することも可能である。わたし自身は前者の意味でしか用いないが、実際の言語学の論文には両方の用例の混在することがある。

「差別化」については、近年、不当な根拠による人間の序列づけや疎外に限って原形の「差別」を用い、他者が模倣・追従できない、商品の開発・サービスの提供などを肥大形の「差別化」と使いわけていることが関わるのかもしれない。それなら、これは同音異語ということなる。

三 研究史概観

字音接辞「化」に関する先行研究をたどってみよう。

まず就くべき論は、野村雅昭氏の「接辞性字音語基の性

格」(『国立国語研究所報告』61『電子計算機による国語研究 IX』秀英出版 1983) である。宮地裕氏の説をうけて、語基を体言系(A類)、相言系(B類)、用言系(C類)、副言系(D類)にわけた野村氏は、「化」が「C類の語基とは、結合しにくい傾向がみられる。」として次ように例示した(原文は横組み。表記を少し簡略化してひく。なお、副言系語基は、「二音」「結局」などである)。

A + 化 機械化 近代化 映画化 制度化 市街化
B + 化 複雑化 正常化 活発化 簡素化 無人化
C + 化 固定化 孤立化 組織化

これは、「化」のもつ「品詞性変換機能をよくしめしている」とのべ、

うえの「C + 化」とみられるものも、それぞれ、B類的あるいはA類的ともみられる。

と補足している。この一行の意味することはわたしの理解を超えているが、Cの語基の三つ、固定・孤立・組織は、前節の甲類の二語と問題の「孤立」であることは注意に値する。

次いで、田窪行則「化」(明治書院『日本語学』91(1986))をみる。雑誌の接辞特集号に寄せたもので、四ページの短さで十分に論じられていない憾みがある。その要と考え

る箇所をひく。

「―化」の意味は、「ある性状・状態に―すること／なること」であり、実質的な意味はほとんどなく、ほぼ状態変化のサ変動詞語幹を形成する接尾辞の機能を果たしていると考えられる。前項はこの変化の結果となるべき状態、性状を表す。従って、まず、動作性の用言系語基(〔例〕研究、発達、処理、指摘……)は、結果の状態を表すにくいので、「化」はつきにくい。次に、結果の状態を持つ用言語基は、最初から状態変化の意味を有しているのであるからあらためて「―化」によって状態変化用言にする必要はないわけで、これもつきにくいといえる。

この記述は、右の野村論文のそれより深く踏みこんだ感じで、いっそう明快である。後者すなわち、結果の状態を持つ用言語基に関する記述が続く。

なんらかの形で語彙の意味のなかに状態を含んでいるので、「―化」をつけることは可能である。この場合、もとの語基と「―化」のついた形との意味の相違が問題となる。

先に、野村論文の「B類のあるいはA類的ともみられる」の意味するところがわからない、とわたしはかいた。右に引用

してきた記述をよむと、それは、結果の状態をもつ用言語基のことらしい。

化の接した語と、その接しない語があるのだから、化にはそれ相当の意味があるはずだと考えるのは当然であり、それを究めようとするのが研究者のたちばである。だが、田窪論文の説明は、本来、化を必要としない語基についてのものなので、少し苦しい。その意味の相違は何であろうか。

「固定する」が、ある対象(多くの場合具体的)を「固定された／した状態」にする／なる、という一過性の出来事を表しているのに対して、「固定化する」は、ある対象(多くの場合抽象的)が「流動的、変動的」でなく、「固定的」であるという性質、属性を持つようになる／するという意味である。

「固定」をめぐる両形の違いはそう断定的に説明された。そして「孤立」の記述である。

「孤立化する」は、動詞の形では「孤立する」とたいした差がないが、「日本の国際政治での孤立／孤立化」のように名詞の形では、「孤立」がより状態、状況のなのに対して「孤立化」がより過程、変化に焦点を当てた表現になっている。

このように、名詞形の解釈も断定的である。

意味が固定的であるか否かを論ずる対象語の一方に「固定」を選んだのは、ややこしくして賛成できない。さて、紙幅の制約からであろう、ほとんど実例をあげず、簡潔な記述と明快な結論が示されている。だが、「固定化」が流動的・変動的ではないのに、名詞の形での「孤立化」は過程・変化に焦点を当てた表現だという。これでは、二つの語において化の機能は反対になっているではないか。それに、わたしの疑問の出発点、タリバーンのひとつ事態を「孤立」とも「孤立化」ともいうことを説明していない。

日本語教育のたちばからの記述・検討をめざすという、加納千恵子「漢字の接辞的用法に関する一考察(2)——「化」の品詞転換機能について——」(『文藝言語研究(言語編)』18筑波大学文芸・言語学系1990.1)がある。これも短篇であるうえに、用言についての言及も二ペイジ強にすぎない。考え方は田窪論文のそれに近い。

加納氏のあげた肥大形の実例十八語のうちに、わたしが拾った語に含まれないものがある。それは次の五語である。なお、実際の用例は一切掲げていない。

実用化 定着化 中立化 管理化 癒着化

加納氏は、原形と肥大形を対比させた記述で、「変動する」は直接的な自動的動作を表すのに対して、「変動化する」は他動的動作をも表すことができる、とする。名詞形についても、「変動」は状态的・状況的、「変動化」は過程・変化を強調した表現だ、と説明する。また、「固定する」が他動的動作を表し、「固定化する」が自他両用になるような例もあるという。このように結論だけ示されては、読むほうは判断が難しい。

最後に、小林英樹「漢字の造語機能」(『朝倉漢字講座』②『漢字のはたらき』朝倉書店2006)をみる。田窪・加納論文とは異なり、具体例をあげて考察した論考である。

その考察では、田窪氏のように原形と肥大形とに意味の違いを認める。

電線が過熱した。 *電線が過熟化した。

右の例では、「電線」は過熱することはあっても、過熟化することはないだろう、という。だが、過熟化することが「ないだろう」という意図が、わたしにはわからない。また、「緊迫し続ける中東情勢」では、緊迫の度合が一定であるという解釈になり、「緊迫化し続ける中東情勢」では、緊迫の度合が増し続けるという解釈になるという。これは、田窪・

加納論文の主張と通ずる。

一方、朝日新聞でえた次の三対では、原形と肥大形の違いがあまり感じられないという。

- ・選挙区へのサービス合戦も過熱している。(1987.8.30)
- ・ペルシヤ湾内での報復合戦が過熱化してくる事態となれば。(1987.10.20)

・通常兵器の面では、日本の自衛隊は相当の規模に肥大している。(1988.6.30)

・国際貢献を理由に自衛隊が肥大化するのを防ぐため、(1991.8.15)

・6年余り冷却した関係が続いたあと両首脳の顔合わせが実現した(1985.11.12)

・レバノン侵攻以降、冷却化していたエジプトとの関係を改善し、(1986.10.13)

肥大形の無意味さは一目瞭然で、实例に基づいた考察、帰納的な論述の強みが現れている。实例をほとんどあげない説明に終始した田窪・加納両論文とは大違いである。

なお、田窪論文の冒頭部分には次の文があった。

この「一化」は、基本的には相言語幹、体言語幹から起動相 (inchoative) の用言語幹を形成する接辞的要素で

あり、「する」をつけて状態変化を表す動詞となる。

これによると、「一化」の接した肥大形の意味は、「孤立化」を例にすると、「孤立し始めるように変化する／変化させる」でなくてはならない。だが、論の中ではそれについては遂に言及されずに終わっている。

四 肥大形の実態

本稿の準備を進めているおりしも、北部アフリカに関する報道に、「急速に緊迫したリビア情勢」「緊迫の度合を増している」などの表現があった。「緊迫」で十分だと思ふこの表現にまじって「緊迫化」もみえた。この例のように、そして「孤立」「孤立化」のように、一つの事態に原形と肥大形が共存したり、一つの事柄が人や報道機関によって両形にわかれたりする实例が多い。紙幅が惜しいので、いくつかの語に絞って肥大形使用の実態をみることにし、対象語を冒頭に太字で掲げる。

固有化 朝日新聞「私の視点」欄、海中にコンブの森を作ろうという、技術士の提案である(2001.10.1)。

・光合成によって二酸化炭素を固定する

・日本が放出する二酸化炭素の半分程度を固定化できる
 ・熱帯雨林の2倍以上の二酸化炭素を固定する
 第二例を「固定」としない理由は何なのだろうか。
 共有化 次に掲げるのは、部落問題解決の方策について論じた文章からの引用である（こべる刊行会『こべる』213 pp.8～9 2010.12）。

・部落問題を「部落外の人たちと共有する」こと
 ・肝心なのは「校区で事件を共有化すること」
 ・「問題を共有する立場」をとるのかということ
 ・「校区で事件を共有化できるかどうか」
 出現順にあげたのだが、「共有」と「共有化」に差があると
 はとても考えられない。

この対について、今夏、興味ぶかい実例に接した。テレビ番組「NHKスペシャル 東日本大震災・3カ月」（2011.6.11）の中で、宮城県幹部部の「東京の人たちにどう共有化されているのか」という談話が、字幕には「共有されているか云々」と出たのである。報道において、見出し類と本文の間でテニヲハの異なることについては、「受診と聴取——日本語雑記・六——」（『成城文藝』214 2011.3）にかいた。見出し類には字数を節約するために無理を冒すのである。このばあい

もその一つかもしれないが、談話の「共有化」を、字幕で「共有」に訂したという解釈もできる。それが当たっていたら、日本語の使用に秀でた人の作った字幕だということになる。

顕在化 潜在化 「顕在」「潜在」の二語は特別扱いすべきだとわたしは考えている。「開放」「減退」「分散」など丙類の二字漢語は上下ともに動作動詞である。しかるに、この二語に限って、上字は動作動詞だが、下字は存在動詞である。複合動詞の文法性は下位成分が担う。あえて「在」を添えて存在の意味を表わしたのに、それを無視して動作性の表現に戻す必要はないはずである。現に『日国大』は「顕在」の語義を、「物事がはつきりと現われて存在していること」としている。だが、現実は大大きく異なる。

まず雑誌論文から（『國語國文』72-4 2003）。

- ・ヲを省略すること、換言すればヲを顕在させないことは（p.1）
- ・必ずしも顕在化させる必要のなかったらしい格助詞ヲのありようの変化（p.2）
- ・格助詞ゼロが、ガ・ノの顕在と並ぶ（p.3）
- ・潜在していた格助詞の顕在化、新たに潜在化する格助

詞の実態 (p.15)

日本語史に関するY氏の論文であるが、原形・肥大形合わせで四語をこのように使いわける必要がほんとうにあるのだろうか。

同じ人の論文『岩波講座日本語』7からも一つ。

主格助詞ガの顕在化と対比すべき近代語の特徴と云って
いいであらう。(P.236)

集約化 今春の三月四日、全国農業協同組合中央会が、将来の農業の担い手になる農家に農地を集約すべきだという提言を発表した。その夜九時、NHKのネット配信ニュースには、「農地を集約して」「農地を集約すべきだ」「農地の集約化」の表現が見られ、廿三時のラジオのニュースには「農地の集約化」があった。毎日新聞・産経新聞・時事通信・読売新聞の各ネット配信記事でもおおむね「農地の集約」であり、中日新聞の紙面には「集約」だけがあった。ネット配信でも、フジサンケイビジネスアイの見出しには「農地集約を掲げ云々」とあり、本文には「この規模に集約化を進める」「農地集約を打ち出す」があった。

「農地集約」のような四字熟語には化の削られる傾向があり、それは他の語についてもいえる。

安定化 本稿準備中の四月十七日、福島第一原子力発電所の

事故処理の工程表を、東京電力の会長が記者会見で発表した。その夜のラジオのニュースは、冒頭では原子炉の「安定化」を、あとの同じ文脈では「安定」を用いた。それが発表資料にあった文言か否か、翌朝の新聞では知りえず、その後のラジオの報道では概ね「安定化」であった。

その前後の朝日新聞からひく。

3号機の安定焦点(5.15)朝刊第二面 見出し)

原発安定 道険し(5.16)朝刊第二面 見出し)

第一原発の安定化に向けた工程表(同右 リード)

安定した状態に持つていくとともに(同右 本文)

分散化 やはり東日本大震災に関連する報道で、六月七日の朝日新聞朝刊は、「全国主要」〇〇社 景気アンケート」と副題して、「震災 リスク分散迫る」という記事を組んだ。リードにも「震災を経験した企業の多くは、リスク分散など事業の見直しを進めている」とある。本文中には、「汎用部品で仕入れ先の分散化を検討し始めた」「本社機能や生産拠点の分散化を検討」とある。複合語とそれ以外とに微妙な使い分けをみせているのである。

「分散化」はよくわからぬ表現である。民主党政権が誕生し

て間もなく、春と秋のいわゆる大型連休について、全国をいくつかの地域にわけ、その連休の時期をずらすという構想が発表された。これは、構想発表の当初から「分散化」であった。なぜ「分散」でないのかわからない、と思っているうちにこの構想は立ち消えになった。

細分化 これにも前項に似た現象がみられる。この夏、東京電力管内では電力不足が懸念されて計画停電の実施が発表された。管内の地域を細かく分け、時間も細かく分けて実施するところなのである。ところが、その構想は発表当初から「細分化」で報ぜられた。

計画停電区域 より細分化：

(読売新聞配信ネット記事見出し322)

対象区域をこれまでより細分化し(同右本文)

ことは何も計画停電に限られるわけではない。東日本震災以前の新聞報道であるが、気象庁が、遠方からの津波の予測システムを導入し、内閣府が「津波避難のための指針」をまとめることを報じた記事がある。その見出しは「データ細分化し/津波予測を向上」であり、本文には「新システムでは遠洋で2・5キロ四方に、近海では0・9キロ四方まで細分化する。」とある(朝刊2011.2.27)。

岩波新書『ことばと思考』(2010)は、認知科学・言語心理学の専門家のかいた本である。当然、さまざまな言語のカテゴリの建て方に関わる話が出てくる。その第1章に、

「ウマ」を農耕用のウマ、競走用のウマ、などによって、細かく区別し、まったく別の名前をつけし、(p.24)

言語学が、その話し手にとって非常に重要なモノに対しては、細かく名前を区別することがあるのは、よく知られている。(p.26)

という記述がある。後者は、「細分化される基礎語」と題された節の第一文である。

前引の箇所とは異なる第3章には次の記述もある。

二つのカテゴリしか持たない言語もあれば、それさらに細分化し、四つ、五つ、あるいはそれ以上のカテゴリに分けていく言語もあるのである。(p.122)

右にみたように、「細かく区別する」「それ以上のカテゴリに分けていく」という句による表現が、名詞になると「細分化」にかわっているのである。

孤立化 本稿の発端になった「孤立化」は朝日新聞に見たものであった。他紙はどうであったか。読売新聞の論説「地球を読む」には、「反テロの戦い」の主題のもと、見出しに

「広範な支援の下で、過激な原理主義を孤立化」、本文に「原理主義者の中の過激な分子を孤立させることに大目標があったのに、」がある(2001:9,24朝刊)。傍線部は同義語と解釈しうる。これが意識的な使用なら、自動詞「孤立」の、「化」による使役動詞化とみえる。

中日新聞朝刊(9,23)には、見出しに「UAE、タリバンと断交 アフガン政権 深まる孤立」、本文に「同政権の孤立は一段と深まる。」としている。日本経済新聞(9,23)も、リードの中に「タリバンの国際的孤立は一段と深まった。」と書いている。新聞の表現も一様ではないようである。

五 時代か人か

自動詞と他動詞の区別はどうして決まるのだろうかという疑問を論じた、認知言語学者の短い興味ぶかい文章がある。題して、「動詞と人間の「はからい」」(大修館書店『言語』2009,5)。物事には放置すると自然に行き着く先があるのだと思うとして、「劣化」「鈍化」「悪化」などをあげた中に「肥満化」がある。ほかに、「風化」「砂漠化」「世俗化」などに加えてあげた「欧米化」も悪化なのかという。そして「衰

退化」「老朽化」で、こうした自動詞には明るい方向の対義語がないという。長らく中間構文を考えている著者の、語と意味の間の微妙な関係を論じ文章であるが、化には関心がなかったようである。

たまたま読んでいた、H氏の論文集には「固定」の用例がいくつかみられた。初めは『日本語の史的研究』(臨川書店1984)。文脈が関与しないので短くひく。

- ・ その拗音形が、固定するに至らないのは、(p.70)
- ・ 一つの独立した形として、話し手の頭(記憶)の中で固定し、(p.120)

続いて『續朝鮮資料による日本語研究』(同1983)から。

- ・ そのままの形で固定して現代語まで伝えられた (p.73)
- ・ しかも、語によっては、促音形が固定して、(p.76)
- ・ 促音音韻の後続音としてはp、という分化が次第に固定する様になる (p.78)

いずれも半世紀かそれ以上さかのぼる時期の執筆で、あとの三例は一論文中にみえるものである。H氏は原形の「固定」だけで、肥大形は用いなかったようである。

右と対比する意味で、発端の節に引いたM氏の敬語史の論

文を、あらためて見ることにしよう。A五判九十ページの長篇である。

・古体の和歌など、位相上の限定化、固定化が顕著である。(p.127)

・やがて、「ます」の限定、固定化が進み、(p.127)

・「御格子まゐる」など固定化した言い方は別として (p.144)

・承接する動詞が固定化してゐるだけでなく、(p.162)

・承接関係の固定化を除けば、(p.162)

この論者には、原形を探すことが難しいほど、肥大形が多い。本稿で、その著者名をローマ字綴りの頭文字でかいた三氏は、いずれも顕著な業績のある日本語学の先達である。その生年は、H氏が大正二年、M氏が昭和五年、Y氏が昭和八年。H氏とY氏の年齢差は二十であるが、Y氏はH氏の愛弟子であった。

さて、第三節にあげた野村論文に「用言語基+化」として例示された語は三つである。「体言+化」「相言+化」の五語に比べて少ないのは、当時の肥大形の少なさを意味するのではないか。野村論文に使われた資料は、¹⁾国立国語研究所報告²⁾56『現代新聞の漢字』(1967)によるもの³⁾、その前年、

朝日、毎日、讀賣三紙の一年間の使用実態によつてゐる。同報告の第II表「用語例数」によると、接辞「化」の使用度数は四十四で、例示された三語は「近代・機械・自由」、体言か相言によるものばかりで、用言語基は含んでいない。それに比べて、本稿でみてきた実態は近年の変化を示すのだろうか。

右のように考えて、中日新聞のデータベースで若干の語について、過去二十年間の変化を調べてみた。その結果が左記の表で、下段が原形の文字列の数、上段がそのうちの肥大形の数である。実例をあげる紙幅がないので、文字列だけの単純な比較である。

年度	1990	2000	2010
固定化	33	90	53
固定	989	630	927
沈静化	39	122	110
沈静	42	126	116
終結化	0	0	0
終結	395	364	277
腐乱化	0	0	0
腐乱	4	8	7
分散化	21	27	38
分散	299	347	297

結論は、二十年間では時期による変化が認められないということである。「沈静」に関してほとんどが肥大形である。

一方、全用例が十九しかない「腐乱」はすべて原形である。

生体としての活動が停止した瞬間から腐乱が進むにきまつているからだろうか。一千例を超える原形だけの「終結」に肥大形がないのは、ある動きの最終点に着目する語だからである。「腐乱化」「終結化」とも、ある古代史学者の著書に例ずつ見つけたものである。

せめて昭和初期以来の数値が得られたら、もう少し踏み込んだ考察ができたに違いないが、現在のわたしの利用できる資料はごく限られている。

M氏より年長のH氏には肥大形の使用がみられず、わたしの五年先輩であるY氏は原型と肥大形の間で揺れている感じであった。接辞「化」の力の衰えという、時代の動向が底流にはあるだろうが、それ以上に、これを用いる人の感性・言語感覚の作用する側面がはるかに大きいに違いない、わたしはそう考えている。

六 結 語

本稿とは別に、わたしはこの夏、連載エッセイ「日本語雑記」の第八として「接辞の陥穽」をかいた(『成城文藝』216(2011.9))。そこでは、字音接辞「性」「論」のからむ「関係性」「方向性」「方法論」の三語をとりあげて論じた。結論は、この三語においては、接辞の有無はほとんど意味をもたない状況が顕著だということ、接辞をそえることによつて高級な内容であるような錯覚に陥っているということである。接辞は便利で魅力ある語であるが、その魅力はまた危険な陥穽でもある。そうした自戒の意味をこめてその文章をかいた。

前稿の字音接辞「性」「論」のあり方に比べると、はるかに広範囲に及ぶ化はどのように考えたらいいのだろうか。断定的な解釈を下しうる自信はないが、現段階では次のように考えている。

「性」「論」とは異なつて多くの語に接する化は、動詞であることを示す機能と認識しておりさえすれば、対象の二字漢語が相言であるか否かの判断に迷わなくてもすむ。漢詩漢文が日本人の教養から切り離されて一世紀、漢語の知識はいよ

いよ乏しくなるばかりである。第二節にかいたように、わたし自身、「乾燥」「老朽」「硬直」などを相言と知ることなくすごしてきた。従って、とりあえず化をつけておけば動詞になる、そのように怠惰な思考がこれの使用をほびこらせているのではなからうか。

第一節にかいたように、化の接尾語化が進んだのは明治期から大正期にかけてらしい。以来百年たった。ことばにも耐用年数がある。当初担っていた機能が、のちの人々に意識されなくなることがあるのは言語の宿命であらう。「性」「論」とは異なり、化は余りにも広範囲に用いられるために、その機能が十分に自覚されなくなってしまったのだ。これが、現在のわたしが到達しえた暫定結論である。

(二千十一年十月)

(くどう・りきお 元成城大学教授)